

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判

三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重版なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典
日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

連句 第38号 季刊



- 国語学大辞典 B5 一六〇〇〇円 国語学全書
- 国語慣用句大辞典 B5 一六〇〇〇円
- 国語慣用句辞典 A5 六〇〇〇円
- 国語史辞典 B6 三〇〇〇円 林巨樹他編
- 日本語語源辞典 B6 一八〇〇〇円 堀井弁以知編
- 京都語辞典 B5 一〇〇〇円 井之口・堀井編
- 擬音語擬態語辞典 B6 三〇〇〇円 堀井 実美編
- 隠語辞典 B5 二〇〇〇円 前田 勇編
- 近世上方語辞典 A5 一五〇〇〇円 堀井兼哲編
- 花柳風俗語辞典 B6 三〇〇〇円 堀井兼哲他編
- 明治新語俗語辞典 B6 三〇〇〇円 堀井兼哲他編
- 難訓辞典 B5 三〇〇〇円 中山肇編
- 名乗辞典 B5 二八〇〇円 荒木典造編
- 名数数詞辞典 B6 二五〇〇円 藤田 隆編
- あいさつ語辞典 B6 二八〇〇円 山本益樹編
- 新版 こぼ遊び辞典 B6 五八〇〇円 鈴木三三編
- 類語辞典 B6 二八〇〇円 鈴木・瓜田編
- 類義語辞典 B6 三〇〇〇円 徳川・宮島編
- 表現類語辞典 B6 四八〇〇円 藤野一徳編
- 新版 文章表現辞典 B5 二八〇〇円 神島・村松編

101東京都千代田区神田錦町3-7 **東京堂出版** 電話03-3233-3741~2

旅硯と旅畳み (南柏雑記 36)	1
作者付	杉内徒司 ... 2
— 私の付方伝 —	
三吟歌仙 たかんな	古館曹人・草間時彦・東 明雅 ... 4
第二回 猫蓑同人会	5
歌仙五巻 捌 秋元正江 杉江杉亭 式田和子 坂本孝子 大窪瑞枝	
俳人協会日独俳句交歓会	下鉢清子 ... 10
— メモランダム —	
第四十二回 猫蓑会	14
歌仙七巻 捌 東 明雅 上月淳子 杉内徒司 高瀬美保 豊田好敏 仏淵健悟 若尾よしえ	
付句募集 (付勝練習二十韻)	21
芦丈翁俳諧問書 (V)	22
「猫蓑作品集Ⅱ」を読んで	梅田利子 ... 24
宗匠制度礼讃	大畑健治 ... 26
二十韻 六巻	27
風薫る	秋元正江 他
梅鉢の紋	倉本路子 他
紅梅や	文音
筍	文音
玉蟲の	中島啓世・東 明雅
梅雨曇り	式田和子・峯田政志
雁帛往来	捌 仏淵健悟 捌 豊田好敏
	29

表紙 (尾白鷺) 宮崎龍火子

旅硯と旅畳み

南柏雑記 36 雅

芭蕉は「おくのほそ道」の旅に出た時、矢立の外に、硯を持っていたのではなかるうか。その時の持ち物として「紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆のたぐひ」とあるが、墨や筆はあっても、硯がないでは仕様がなっていないか。旅の途中のいろいろなメモを取る時は矢立を使つたに違いないが、宿について、短冊や色紙を懇望された時は、おそらく荷物の中から旅硯を出して、書いたであろう。私が持っている俳諧師用の旅硯はヨコ一〇・六cm、タテ一九・四cm、厚さ一・一cmの櫛の板をくり抜いて硯・朱硯・墨・朱墨・筆一本・朱筆一本の外に、九cmの物指を埋め、その物指の中に、小刀と錐とを仕込んだ精巧なもので、蝶つがいと同じ寸法の蓋がかぶさっている。作られたのは、幕末かあるいは明治になってからかも知れないが、とに角現代ではこんな細工物を作る人は居ないだろう。ただ、これよりも大ざっぱな作りのものは、その後、度々骨董店に現われ、時代も古いのがあつたに違いない。

矢立は墨壺に筆を入れる筒のついた携帯用筆記具で、私の持っているものは商人用らしく実用一点ばりのものであ

るけれども、これでも十分利用できる。私はこの矢立というものが日本人の発明した便利な筆記具として感心して来たのであるが、今年の五月トルコの Cappadocia に行つた時、お土産店に矢立があつて、びっくりした。そして、イスタンブールの空港の上産物店でもまた同じものを発見したので、物好きの心抑えがたく、その一本を一〇〇、〇〇〇リラ (日本円二〇〇〇円) で買って帰った。このトルコ製矢立は、金メッキの鉄製らしくいろいろ装飾はされているが、いかにも作りが粗雑である。これを誰がどのようにして使うのか聞く暇もなく、飛行機に乗ったわけであるが、そうなれば矢立の元祖はおそらく中国あたりで、これが東に流れて日本に入り、シルクロードを西に辿つてトルコに流れたのではあるまいか。今度、中国を旅行したら骨董屋で第一に探してみたいと思つている。

今まで矢立は旅にもつて行って使つたが、旅硯は七月熱海で使つたのが最初である。これも便利なので、これから大いに利用したいと思つているが、そうなれば用紙も昔風に、旅畳み——半紙を縦二つに折り、更に四つ折にして真中に鉄を入れて作る——を使わねばなるまい。そうなれば、俳諧師としての実も自らそなわるというものである。

(正誤) 第三十七号の南柏雑記で、生涯七千巻の作者を贅川他石と書いたのは、松永嶋堂 (一八三八—一九一九) の誤りでした。謹んで訂正致します。

作者付

私の付方傳

杉内徒司

1 三井武翁に連句を習って八巻目の歌仙を巻いた折、左のような付をした。

投げやりし蜜柑独占猿のボス

子は二人とも芸術で喰ふ

(武翁 捌「茶亭の沙羅」昭和42・8・21)

武翁 徒子

「投げやりし蜜柑」から芥川竜之介の短篇「蜜柑」の一節―奉公先へ赴こうとしてゐる小娘が踏切まで見送りに来た弟たちに車窓から蜜柑を投げて見送りの労に報いるシーンを思い出し、芥川の長男比呂志は俳優、三男也寸志は作曲家―二人とも芸術家だと考えるに至って作句した。

武翁はこの考え方をほめてくれたが、後に思うとこれは「作者付」の濫觴であった。

2

根津芦丈三回忌の追善集『芋日記』上梓を記念して、都心連句会と信大連句会が初めて顔合せをした諏訪湖畔の久保寺の俳席の作品に左の付がある。

哀れさよ清姫めきし悩乱に

別れも愉しルナルの作

藤森雪溪 徒司

私は昭和四年の夏休みに、その年の一月から配本になった菊池寛全集(平凡社版)を借りて、短篇、長篇小説を読み耽ったのが長い歳月の後に連句の付けに蘇ってきたのに我作ら奇妙に思った事を覚えていて

翌年の松山市で開かれた第五回国民文化祭では次のように付けた。

病室の玻璃戸やさしき夏の月

西原李花

「肉弾」櫻井忠温の作

徒司

(徒司捌「秋うらら」(平成2・10・20)

日露戦役の勇士陸軍の櫻井忠温は愛媛県人。ついで乍ら日本海海戦に参加した水野広徳も同じ愛媛県人。

松山大会で初めて連句を大会種目に実現させた松山の鈴木春山洞が上京した折の歓迎会では次の付句を物した。

鯛のひそめる来島海峡

中島啓世

水野広徳「此一戦」の忘らるる

徒司

(春山洞捌「六義園落葉」(平成2・11・9)

4

菊池寛の効めは仲々のもので次の一連もある。

サンダラスアロハシャツで父帰る

市野沢弘子

「第二の接吻」菊池寛作

徒司

ホロホロ鳥なかず嵯峨野ははだれ雪

同

(徒司捌「枯木立」平成3・12・1)

ホロホロ鳥は「愛染かつら」の主題歌西條八十作「旅の

(野村牛耳捌「邯鄲無月」昭和45・9・13)

「邯鄲無月」は『夏の日』(角川書店刊)に掲載されたが、この『夏の日』に掲載されている牛耳・高橋玄一郎文音「嶺々粧う」に次の付がある。

髪の毛たばねふかむ唇

玄一郎

読みふける「高野聖」は鏡花作

牛耳

(昭和46・9開吟)

2

私がこれをほめると、牛耳さんは「別れも愉し」の真似ですよと微笑されたので私はびっくりした。

この前後に前句は思出せないが私は

「凱旋門」はレマルクの作

と付けた事もある。

3

英真湾の真珠筏に月凍つる

東郁子

「陸の人魚」は菊池寛作

徒司

(山田和久捌「柿紅葉」平成元・11・5)

前句の真珠から菊池寛の小説「真珠夫人」を思い出し、同じ作者の「陸の人魚」で付けたのだ。

夜風」をもじったもので面映い。

この時機「作者付」が定着してきたらしい。そこで最近の「作者付」二句連句の二例をしるしてみる。

思ひ出せぬ小説の題沈丁花

「風と月と」は三汀の作

この付には多少の説明がある。久米正雄の小説「沈丁花」が東京朝日の朝刊に連載されたのは、昭和八年六月から十一月の間。「ちんちょうげ」とルビがふってあったのを覚えていたが、その久米正雄の戦後に書かれたある小説の題が思い出せなかった。それは夏目漱石の門に芥川竜之介等と出入する頃からの久米正雄の自叙伝小説だが、最近その小説の題は「風と月と」とわかった。

久米正雄は中学時代河東碧梧桐を師と仰いだ俳人三汀と号し、句集『返り花』が昭和十八年刊行されている。

3

いざさらば九年馴染みし多摩訛

「あにいもうと」犀星の作

犀星のこの小説の舞台は梨畑の多い多摩川べりだからだ。

顧みると私の「作者付」はすべて古い大正時代の作者だが、要はこの伝で石原慎太郎、司馬遼太郎の「作者付」が考えられるのではなからうか。

三吟歌仙 たかんな

古館 曹時 東草 明時 雅彦 人

たかんなの寺の中まで郵便夫
雨があがると鳴ける初蟬
ソノダ水チーズケーキを誂へて
里の果より女三人
大寒の月照るばかり坂の上
今年も壁にすが洩りの跡
風強く腰痛とくにはげしかり
釣の支度に手入する竿
新婚ははるかアマゾンジャングルへ
一糸まとはず湖に抱かれ
カーテンのレースにしとど夜の露
相撲に負けてひとり寝る月
膝小僧ふたつかみで冷まじく
べったらしの遠きざはめき
贗札の沙汰も何時かはおさまりぬ
壬生狂言のぢやらんぢやらんと
花篝薪がくづれて燃え立ちし
春のコートのやや寒き宵

曹時 明人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人

街頭にこのごろ多き異邦人
場外馬券はづればかりぞ
我慢してこぼさぬ前の泪ため
嬰兒胸に雪女郎佇つ
常陸坊海尊がわが背の君よ
泥棒猫とのしられたる
喜寿となり傘寿となるも夢の夢
桔梗なでしこ蕾ふくらみ
月読の命に注ぐ吟醸酒
龍田の姫を偲ぶ佛
棧敷より覗けば髪の觸れあひて
股アぐぐれと舞台正面
時は今雨降りしきる御前の石
鳴立沢もどぶ川となる
杖を引く畳の上のうしろ影
けはしさありて如月の空
現世の現の花に滝櫻
文学館に雛の饗宴
平成四年五月四日
於 俳句文学館

曹時 明時 雅彦 人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人 彦人 雅人

第二回 猫蓑同人会

歌仙五卷

平成四年六月十日
於 俳句文学館

若葉風

秋元正江捌

日本民芸館特別展「信と美」
若葉風李朝の巫女は口結ぶ
夏の館に紛れ込む蝶
波乗りのひとの巧みに涛越えて
ロープに挟むタオル・カラフル
つなぐれし犬吠えたる白き月
子らを動員もろこしを焼く
北行けば稲架のつくりも武者がまへ
盛塩したる古き料亭
売れつ妓のチャームポイント泣きぼくろ
ナナハン飛ばす彼と一体
数へれば後二千日わが余命
織月冴ゆる後立山
ワルキューレ駆くるが如く雪しまく
破れし譜面をオークションで買ひ
つれづれ、といふ弁当の旨かりき
「とまと」「あさひ」と名のる銀行
校長の着任挨拶花の影
蛙解剖逃げてつかまる

正江 郁子 元子 哲元 哲元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元

山肌に種蒔爺さんみつけたり
ローカル駅の無人改札
エコロジーツアー空缶拾ひから
これが楽しみこなからの酔
赤禪の頃からずっと忘れず
芦屋マダムの遠きまなざし
絵解き僧美形におはす道成寺
乾燥粉末おろし大根
きつつきの開けたる孔のぼっかりと
冬の仕度も郷に従ひ
倫敦の巻さまよひ月仰ぐ
「夢十夜」書く鬱の漱石
塗壁といふ化物の出づる宿
つかかへ棒で半生を過ぎ
深呼吸してジョギングを再開す
干鰯焼く匂ひ流れて
花ぐもり墨師ひと部屋ひとり棲み
弥生尽きたる歌仙張行

郁子 元子 哲元 哲元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元 遊元

茅の輪

神妙に親子で潜る茅の輪かな
 木々の梢を過ぐる青嵐
 垣間見るテレビドラマの可笑しくて
 猫すり寄りてせがむ夕食
 下り月鱗のやうな雲間より
 自転車こいでうそ寒の人
 舞茸を籠いっばいにつめこんで
 分け与へたき顔のあれこれ
 色白の「秋田小町」に「ひとめ惚れ」
 単独赴任の日々はたのしき
 ボルドーにワイン利き酒はしご酒
 大道芸に喝采の沸き
 年用意駆けづり廻る街に月
 牡蛎船二隻岸に繋がれ
 方言も商ひ方便使ひ分け
 下駄っつかけて外湯探訪
 花吹雪作務衣の僧にふりかかり
 BGMは春蟬の歌

杉亭 杉亭
 明雅 明雅
 良子 良子
 千雪 千雪
 澄子 澄子
 志げ子 志げ子
 雅良 雅良
 良雅 良雅
 同良 同良
 同雪 同雪
 同亭 同亭
 同志 同志
 同同 同同
 同雅 同雅

やまんばもつちのこも出てうららかに
 おっとり刀村の若い衆
 にぎりめしいぶりがっこをとりまはし
 色とりどりのパック包装
 花火はぜ掛声「玉や」河川敷
 夢の島では蠅退治する
 無味無臭天然水が飲みたいの
 恋女房に頭上らず
 ダイアナ妃不仲報道次々と
 月に響けとシンセサイザー
 桐一葉はらりと落ちし岩のかげ
 婆精出して鱈干す浜
 鬻鑠の爺はまたも旅仕度
 エアロビクスにテニス・ピンポン
 六本木・渋谷・原宿・吉祥寺
 朝の広場で鳩に麵麴
 桜時快気祝ひの嬉しくて
 中天目指し昇り行く風

杉江杉亭捌

梅雨じめり

ふくろふの睨重たし梅雨じめり
 茸替へすませ涼し薬屋根
 甜瓜ガラスの皿に切り分けて
 おもちゃのピアノ叩く幼児
 地平線大きな月の淡き赤
 秋の渚に万祝で待つ
 磨き盆耳なれし声気にかかる
 肩までのびて髪の眩しき
 誘はれてすぐOKの軽はずみ
 牛歩戦術疲労困憊
 マティニーをちびりとやってダート投げ
 役者稼業のサイン習ひし
 月明り思ひ出せぬか懐手
 聖燭節の列の肅々
 バルセロナオリンピックの近づきぬ
 武蔵丸にも通訳をさせ
 橋くぐる花見の船に揺れてをり
 気球ゆらゆら霞みたる空

和子 和子
 淑子 淑子
 弘子 弘子
 千町 千町
 好敏 好敏
 麻子 麻子
 弘子 弘子
 敏子 敏子
 町敏 町敏
 麻敏 麻敏
 淑敏 淑敏
 淑子 淑子

よるこびはひとつ春愁二つ来て
 喪にありてこそ人を恋ふなれ
 はぢらひて紅ひく媿愛しらし
 紙鉄砲につきし尻餅
 尺蠖の枝に似せたる天の智慧
 小悪魔住むサルビアの奥
 株もだめ金利も低いどうしよう
 付箋をつけて戻す郵便
 カンバスの男の顔をゆがませる
 知らずに認知させられて月
 風化せし奈良の石櫃こぼれ萩
 山峡の道辿る漸寒
 熱燗は五臓六腑にしみとほり
 目玉のうまい鯛のかぶと煮
 『ガテン』みてブランド好きの大工さん
 君も脱サラ僕も脱サラ
 かはたれに花の香りの艶めける
 いろはにはほへと夢の臍に

式田和子捌

時の日

時の日の高架に鳩の憩ふかな
うす紫に棟咲く頃
林菌下駄旬のいさきに串打ちて
ちよっと喋れる英語かたこと
望月に運動会の準備終へ
やや寒の町風呂屋賑ふ
おくんちの童を踊らせる髭男
目をつむらせて触るる唇
色よりは食ひ気盛りと思ひしに
地球サミット誰が為の会
月冴ゆるビレネーの北ロマネスク
漱石忌なり持葉たづさへ
喜寿にして青春気分仮免許
フルート流る丸木小屋から
幾何模様裂織を子が習ひける
記念切手を舐めて貼りける
転勤の荷物をほどく花の下
遠き蛙のいつか途絶えて

坂本孝子捌

孝子 淡雪の池に吸はれてすぐに消え
啓世 萩の茶碗でひとと昼酒
よしえ 張り込のポケットベルに舌打し
淳子 万札の束詰めて駆け落ち
清子 縋る恋狸に秘事を覗かせて
久美子 辻の地蔵に供ふ寒菊
美清 バス停をお上りやして東どす
同 美清 エスプレッソにプチケーキ添へ
え 鮮かにやくぎも往なし支配人
世 余暇こつこつと綴る美術史
淳 灯を消せば月光蒼くあふれけり
清 風炉の名残の水屋閉され
世 秋籬を売りに峠を越え行きぬ
美 森林業の跡継ぎはなく
世 陶像の翁に当る大西日
孝 石に坐りて煙草一服
世 幻の花のさかりを目裏に
麝香あげはの翅のたゆたひ

世孝え世美同清淳え淳美淳え清美清同淳

繡線菊

大窪瑞枝捌

繡線菊の穂に咲く門や百人町
舗装路かすめ夏の燕
かき氷兎等の口もと赤くして
ビデオ予約がちよっとお得意
待宵を誘はれて居る無尽講
土間に転がる落鯛の魚籠
ゆく秋の沖見遥かす竜馬像
胸の分厚い彼に惹かれる
時かけて紡ぎし想ひひとりに
酒は飲んでも眠るべからず
お顧客様招待ツアー商栄会
ホカロンこたつ暖炉湯たんば
雪吊の木の間に織き月懸り
「敦盛」吟ず琵琶を構へて
かにかくにいままだ残れる尾軀骨
牛の歩みでめぐる国会
気紛れな花びらが又ひとしきり
山が笑うた空も笑うた

瑞枝 レガッタのオイルを揃へ息揃へ
美保 バンド集まる駅の雑踏
隆秀 差配師に負けは取らない日本語で
雅代 わたしよめさんみつけたいのよ
利子 抱かれて後は骸となるばかり
達子 原爆の忌を夢に忘れず
利子 軒下の糸瓜ぶらりと風に揺れ
代 プリンスもどきちよび髭の月
保 利酒のロスチャイルドに上機嫌
秀 だめ虎遂に首位の栄冠
達 島原は受難の歴史くりかへし
秀 あっけらかんと語る深敷
代 釜揚げのうどんに添へる葱薬味
保 気の合ふ同志いつも囲む暮
同 名画祭デイトリッヒを特集す
利 永ければなほ惜しむたそがれ
代 恍惚と花の真中に立ち尽くし
同 もつれて離る黄蝶白蝶

達枝利秀同代達保秀利達保代利秀利達利

俳人協会日独俳句交歓会

メモランダム

下鉢清子

五月二十一日から三十日までの十日間、俳人協会主催の「日独俳句交歓会」に参加するという旅に恵まれた。訪独団の団長は「春燈」主催の成瀬桜桃子氏、世話役は俳人協会事務局局長で「青山」主催でもあられる山崎ひさを氏に、「藍生」主宰の黒田杏子氏、男性十名女性十二名の超結社の人々総勢二十二名という顔ぶれであった。

ケルン・ベルリン・ミュンヘン・フランクフルトとドイツの東西南北に位置する主要な四都市を巡りつつ、ドイツ国内の俳句作家や愛好者との意見の交換に努め、その間寸暇も惜しまず名所旧跡も尋ね、多くの風物に接しようとのスケジュール、企画発表時から「今度の旅は並々ならず厳しいよ」などと言われていたものである。この日まで日本国外には一日だって追放処分を憂き目に合ったことのない私であるから、俳句交歓の名が付いた十日間の長旅に二の足を踏んでいたが、五月の満目草木真緑と百花繚乱の最も美しい時期のドイツを歩くことが出来たのは、生涯忘れられない旅の一つとなり関係の方々に感謝一杯である。快晴の二十一日午後二時、成田を発つたルフトハンザー航空七一一便は、ブッサーズ（灰鷹の一種と言われる）のマークも鮮やかに、只管に入口を追って西へ西へと飛び続

ける。オビ川の巨大な蛇行、ウラルの雪溪を一万二千米の高みから眺めつつ、一睡二睡午睡なのか就寝なのか何時目覚めても昼の光の中を、狭い座席で十二時間の座禅を組み続けたのである。南無阿弥陀。

白夜の国の第一夜はフランクフルトのアラベラグラントホテル、時差七時間余の時計を現地時間に合わせた。

聖堂に白夜未明の月淡し

清子

榎の森白夜ふくらみ明けにけり

同

第一回の交歓会は二十三日（土）ケルンの日本文化会館で開かれた。白鳥や鴨の遊泳する湖を前にした鉄筋の美しい建物で、ポーチを巡る野薔薇は真々盛り、空を楊柳の絮であろうか無数に浮遊していた。階段式に椅子の並ぶ会場の大ホール、館長の荒木忠男氏が応待に違が無い。土曜日なので事務員はお休み、ボランティアの方々も手際よく仕事を捌いておられた。午後三時より、ドイツ俳句協会会長ブァンジャーバー女史の「ドイツ現代HAIKUの四分類」成瀬桜桃子氏の「日本俳句の季語・その他」関森勝夫氏の「芭蕉・蕪村・一茶」の講演に続く討論がこの会場のプログラム。日独俳句交歓会の第一日目にブァンジャーバー女史の講演を伺うことにより、ドイツに於ける俳句事情を掴み

得たことは、続く他都市の人々との交歓の折の良い尺度となり幸いなことであった。

ドイツ語の俳句とは俳句の五・七・五に倣ったリズムの三行詩と言えればおわかりになるであろうか。この三行詩を日本語に訳して下さる。今回の訳は公使でもあられる館長の荒木氏、俳句も連句も研究の深い氏の訳である。ドイツ国内での俳句は夫々の都市を中心にして活動しているが、横の繋りも荒木氏がとっておられると拝見した。

ドイツ現代HAIKU四分類とは次の様なものである。

1. 伝統指向的なHaiku
2. 非定型の実験的なHaiku
3. 内容が非伝統的なHaiku
4. 感情を強調する、あるいは瞑想的なHaiku

少し説明を加えてみると、「伝統指向的なHaiku」は、芭蕉が確立した蕉風新風を、その弟子達が三百年を通して維持して来た伝統に準拠したHaikuで、三行十七音節という形を厳格に守り季語を尊重する自然詩、蕉風が良く研究されていた。季語についてひと言註釈を加えておくと、南はアルプスから北のシュレスビヒ・ホルシュタイン地方までと広い範囲であるために、気候も動植物も可成りの差があり、又ここ数年来の気候不順の為に春夏秋冬の季語として取り上げても、生活とは合わない場合があるので、季節概念を示す言葉、例えば「五月の牧場の霧」のように扱って、柔軟な季感表現を取っていることがわかる。私たちが言う第二章は二極間の緊張として表現し、切字の

扱いについては思想の方向転換「息止め、せき止め」と呼んでいる。写真のコピーのようなものではなく、緊張と意外な発見を中に含んだ流れるような短詩をめざしたいという考えは、俳句の原点をよく研究している。「非定型の実験的なHaiku」は、音節が五・七・五に拘らず自由なものである。「内容が非伝統的なHaiku」は環境問題、ドイツ統一のプロセス、都市問題、政治、世界的事件、天災などの感情移入のものである。すべての三行詩をHaikuと呼んで良いのか、川柳の分野とも思ふべきものを擡頭を如何するか、洋の東西を問わず問題は多い。「感情を強調する、あるいは瞑想的なHaiku」は著しく異っている。何等かの信仰や思想、處生訓として意図的に読者に強要するもので、詩の自由な考えを閉ざす。

この会場で私の隣に坐られたご婦人があった。流暢な日本語を使われるので、「随分日本語がお上手ですね」と話しかけると、つくば大学教授加藤慶二先生の恩師、ボン大学教授であられたツァファルト先生の令夫人で、慶二先生の著書『ドイツハイク小史』を手にしておられた。ツァファルト教授は十二年前に亡くなられたが、慶二先生にお目にかかれるかと思ひ出席したと仰有った。八十五歳ですと言われる令夫人が、ご夫君がお好きであった「おらがそば」の句を失念したのでと質問をされておられた。名刺の裏に「しなでは月とほとけとおらがそば」と書いて差し上げた。ドイツと言う国が急に身近に感じられた。

桜桃子氏は「私はナルセです。よくナセルと間違っって呼

「無」について世阿弥の能や利休の茶道に触れつつ、俳の精神を述べられ、俳句では欠かすことのできない季語について説明された。続いて関森勝夫氏が、芭蕉・蕪村・一茶の生涯と夫々の詩精神を話されたのである。

会が果てて懇親会場に移動すべく外に出ると突然の雹の洗礼を受けた。ツァファルト夫人がその中を、私達のバスが見えなくなるまで手を振っておられた。

夕かけてケルンの雹や草にとび

清子

マロニエが咲くマロニエの花の中

同

四都市の俳句交歓会の中で最も胸に響いたのは、旧東ベルリンの俳人との会であった。第二次世界大戦後は政治的分断を象徴する都市として、余りにも有名になったベルリンだが、一九八九年十一月九日の夕方から夜にかけて、二十八年振りに東西を仕切っていた壁に穴が開いた。都市を二分していた壁の崩壊以来旧東ベルリン地区の俳人達との交流を持つことが出来たのは、今回の訪独団が最初ではなかったろうか。すっかり観光の目玉となった壁を越えて東地区へ入ると、緑美しい並木や森ながらやはり東区と西区の落差が目につく。テレビの放映で何回も眺めたブランデンブルグ門は、今はベルリン統一の象徴となり、広場に立つとヒトラー自裁と言われる壕を見渡すことが出来た。

赤煉瓦潰え蓬々とひでり草

清子

菩提樹並木抜けし日傘を開きけり

同

辛い日々、渴きに悩まされてビールも一口二口飲むようになる、ようやく旅も終盤に近づく。慌しく観光と交歓と錯綜する中を、飛行機・バス・列車と乗り継いで移動し続ける。ドイツは実に清潔な整った国であったが、三回目に訪れたミュンヘンは特に美しく陽気な楽しい町であった。世界最大のビール祭オクトーバーフェストの町で、新市庁舎の鐘楼には、ヨーロッパ最大の仕掛け時計の人形達が踊る。世界一と言われるビアホールで音楽ショーを見つつ夕食となったが、とめどなくダンスを続ける人々の軽やかなステップを羨しく眺めているばかりであった。

ミュンヘンの俳句交歓会は実に明るく温かく楽しいものであった。夫々のテーブルスピッチもさすがに俳人詩人の集まり、ウィットに富んでいて会を盛り上げた。中でもオランダから参加の弁護士「私は美人でも俳人でもない」から始まった挨拶は傑作、それも日本語の挨拶であった。

ミュンヘンの花マロニエに酔ひにけり

清子

三光鳥行脚の眠り浅くあり

同

故国恋ふ青芝畳栗鼠走り

同

ようやくに最終の会場フランクフルトへと辿り着いた。日本の七草粥に因んで工夫されたと言う七草のソースを添えた肉料理を用意して下さっていた。俳句とは何と優雅なものであろうか。そうした中渡辺勝氏のドイツ語のスピーチ「ドイツ文学と俳句」は拍手鳴りやまずであった。

異教徒にうつばかづらの筒の花

清子

荒木忠男氏から連句を誘われ、会場をアラベラグラランド

菩提樹は花盛りであった。交歓会は大抵夕刻から始まるので、日中は森鷗外の下宿跡や旧日本大使館で現在の日独センター等のご案内を受けた後、ベルリン俳句協会発足パーティーに出席した。バスが五階建の建物前に着くと、ベルリン俳句協会会長ビエル氏が入口の袖垣に、「ベルリン俳句協会会館」の看板を桜桃子と共に結えた。小道には風露草、うつぎ、ヒマラヤゆきのしたなどが咲いていた。今日のこの時から此処がベルリンの俳句の中心となって活発な活動が開始されるであろう。協会会館はこの五階の二部屋で、訪独団とベルリンの俳人達で一杯の中を、皿に盛りられたトマト、セロリ、マッシュルームなどの生鮮野菜を掴みつつ、ビールを酌み合い夜の更けるまでの歓談が続いたのである。日本の人々を迎えるのにパンと水だけと思っていたが、会員の方々が持ち寄って下さったとのビエル氏のご挨拶、このようにして日本の風雅を理解して下さろうと

していると思うと胸が熱くなった。第二回目の交歓会はまことに感動的に終わったが、私にとっては青天の霹靂があった。折鶴を飾ろうと床に坐り込んでいる頭上に飾絵が落下し、一撃したのである。散乱した硝子の破片の中に一瞬目の前が真っ暗になったが、怪我と言われる程のことも無く、切り抜けることが出来たのは、訪独団にとって何よりの幸いであったと喜ぶ外は無い。欧州は飲料用の真水には不衛生な国と言われた。ツァファルト夫人がドイツの水道は大丈夫と言われたが用心するに越したことは無い。水を頼むと炭酸入りが主であるから、アルコール類一切駄目人間には

ホテルに移し半歌仙の首尾となったのはよい記念となった。扱少しは観光地についても書かねばならぬだろう。十日間のうち随分と名所旧跡を経巡ることができた。多くの宮殿を見、名庭園を巡った。六百年かけて作り続け今も猶完成途中であるケルンの大聖堂、彫刻、絵画、ステンドグラス、etc、これ等の負っている歴史を思い単に被写体とするのみでなく、歳月の如何に悠久なものであるかに感動し、時空を超えて昔の続きに今があることに畏怖した。旅は自然と人間との対比の中に、自然の恒存性に較べて人間の無常性を感じさせる。ゲーテの命終の語は「もっと光を」であったとされる。されば私が世を去る時には、「もっと連句を」などと最大に気障な言葉を吐こうか。

異邦人に卵の花腐しも無かりけり

清子

このところ帰国怠けの冷豆腐

同

連句入門

東 明雅著 中公新書

連句辞典

東 明雅 杉内徒司編 東京堂出版
大畑健治

新炭俵

東 明雅著 角川書店

第四十二回 猫 養 会

歌仙七卷

平成四年七月十五日
於 深川芭蕉記念館

若 竹 や

東 明 雅 捌

若竹やけふは開扉の芭蕉堂
 心字の池に落とす滝音
 冷奴藍の小鉢に運ばれて
 アニメ番組釘付けの子ら
 高窓を月の兎の走りゆき
 たどり着きたるやや寒の駅
 利酒の過ぎたる酔のほろほると
 嫁取り話聞き耳をたて
 お相手は東大出だよ淳子さん
 マイルドセブン買ふのやめよう
 蒟蒻玉干され秩父の七草寺
 義理と人情数へ日の月
 亡き母がおいでおいでと夢の中
 もったいなくておこげ頂く
 バルセロナ働き蜂も進出し
 百年たつて出来ぬ教会
 あっけなく花を散らせる通り雨
 乞食の身の貰ふ春風邪

八代

明 利 清 淑 良 光
 雅 子 子 子 子 子 子
 焼いて食ふちりめんじゃこは子を抱き
 老舗料亭備前大壺
 厄よけの猿が鬼門の築地塀
 道きくたびに道のびてゆく
 短夜の孔子孟子を読み継ぎて
 上履さがし叩くごきぶり
 ぬけぬけと「ドン・ディスターブ」出したまま
 キッスマークをかくすソバージュ
 人食って生きし半生令夫人
 鳴かず飛ばすの庭の鶯草
 薬屋根のずしんと重き亥中月
 敬老の日に祝辞とちつて
 つれ立ちて女峰男峰の九十九折
 駐在さんは鯨髭なり
 偏差値で決まる生涯佗しめる
 入学祝ひの時計狂ひぬ
 試運転新幹線は花瀾漫
 百千鳥聞きいこふ夕暮

光 利 清 同 清 代 光 利 同 清 光 利 光 清

朝 顔 市

上 月 淳 子 捌

朝顔市雪ながらに買ひにけり
 夏燕とぶ路地の遠近
 声高にブル帰りの児等のあて
 パソコンゲームキーの取り合ひ
 やはらかく瑪瑙色して窓の月
 釜の栗飯はっかりと炊け
 そぞろ寒高原列車の人となり
 眉濃き君に逢へる嬉しさ
 手が触れただけで早鐘うつハート
 ブローニングを婦警携帯
 国宝の仏像展に皇太后
 校倉の庭匂ふ蠟梅
 月光に鮠の水尾のくつきりと
 体内時計酒を欲しがる
 両切の葺しんせい愛用し
 三代同居表札の文字
 花吹雪埋めし河口に友と佇ち
 汐干狩にと連ねゆくバス

淳 子 淑 正 千 治

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
 ヨーデルの帽子に雉の羽をつけ
 訛の強き英語話しぬ
 兜町相場の鬼と異名とり
 増えるばかりの常服健康
 可愛さと煩しさの孫の来て
 産土神の鈴緒新し
 情念の炎のごとく夕焼けぬ
 眠り安けくなれし手枕
 しがみつからみつきてはまとひつき
 石けりしてる駄菓子屋の前
 消ゆもよし火葬場照らす月青し
 粧ふ山を結ぶ稜線
 ロシアンティジャムをとかして冬隣
 単身赴任時間たっぷり
 新聞のまともて届く七日分
 頭上せはしく蛇のとびかふ
 ナビゲータ地図に花びらまひ込みて
 旗をなびかせ鯛網の船

淳 子 淑 正 千 治
 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

令法の花

杉内徒司捌

深川や令法の花の芳しき
夏のはかなる小さき水音
金玉糖玻璃の器に盛りわけて
テスト満点満面の笑み
月おぼろ用事ありげに友の来る
猫瘦せて待つ春寒の家
流水に埋めつくされし北の海
サツに追はれて国境を越ゆ
円らな瞳うまきテキラすすめられ
思ひ思はれ結ばれぬ恋
梨園には梨園の決り習ひあり
さっと入院組の小頭
新月に打込まれたるホームラン
おくんち囃子賑やかな宵
こほろぎも暫し鳴き止む駅の裏
ロケ隊の来るダムになる里
銀紙の刀見得切る花吹雪
はるか彼方に初虹の立つ

徒司 鈴の雛ふって余生を楽しめる
郁子 勅願尼寺の灯をとます尼
澄子 京都御所内に鬼の間ありといふ
みづゑ ワトソン君と探す馬車道
香 姉と張り合つて射止めしうちのひと
千 いつもねんねと軽くいなされ
澄 熱燗で離婚届に判を捺す
ゑ 狐がそつと覗く北窓
郁 冷蔵庫の豆腐氷りて凍み豆腐
雪 エコロジー説きゴミの高出す
香 思ひ出の湯の町エレジー歌ふ月
司 棹さし渡る雁の群
ゑ 秋場所も乱戦模様見逃せず
郁 書いては消しぬ夢といふ文字
澄 旅人算小股内股追ひつけず
香 牛にボケベル持たす牧場
澄 濛めぐる枝を潜りぬ花の雲
郁 右に左に蝶を追ひゆく

梅 雨 明

高 瀬 美 保 捌

梅雨明や河口に近き橋渡る
麻の暖簾はめざすどぜう屋
七宝の優勝の楯飾られて
割込み電話ひっきりもなし
見回りの守衛の仰ぐビルの月
宅急便で林檎受け取り
鴟の声^う止法眼蔵講義終へ
伽羅の香残し過ぎし衣擦
エスバニア万博へ皇子発ち給ふ
足にまつはるチワワ、スピッツ
張り紙に「勧誘禁ず」住宅地
騒音をまき選挙はじまる
極月の金借りまはる月あかり
おでんの屋台呷る燗酒
病院の待合室のサザエさん
近々と見し母さんの髭
野外能高砂の尉花の下
麗らかなりや佐渡の内海

美保 春深し何忘れむと出でし旅
孝子 正午の時報時計合はせる
隆秀 給食のオムレツとピザみんな好き
志げ子 甘ったれるな崩すアリバイ
道子 先端に白きがゆらぎ半夏生
弘子 髪洗ひをり立膝をして
志 けふこそは思ひの丈をたつぷりと
孝 デイスコ、カラオケふたり熱々
同 高速路テールランプが小さくなり
弘 女神の像に月光が降る
秀 定年のわれは糞虫^糞放屁虫
道 南京豆は殻つきがよし
孝 水桶の馬面剥が向き向きに
弘 古きミンシンを踏める仕立屋
道 行商の荷にかくれ行く田舎道
孝 かぎろひ燃ゆる高原の椅子
志 花吹雪無音の棠を聴くごとし
道 吟行会の寺の鸞苔

向日葵

豊田好敏捌

向日葵や大川端に風渡る
 暑中見舞のハガキみづ色
 生駒をあらひに造りもてなさん
 とろりとろりと居眠りの嬰
 ものの鬩きはやかにあり初の月
 土蔵の壁にとまる溢れ蚊
 今年酒口に含めば香の立ちて
 ハーフの娘よりクォーターがよし
 ハチキンの妻に負けじとボディービル
 通勤電車いつも満員
 麻雀屋空卓ありの札かかけ
 金の感覚違ふ一桁
 「都鳥」さらふ三味線月を受け
 前垂掛けで足袋は別珍
 父祖よりの民具並べてジャパンデー
 キヤノン・ニコンにミノルタの列
 花びらの肩にかかりし僧の行く
 春泥の靴拭ふ子供等

好敏 中天に連なる風の舞ひ上がり
 篤子 古伊万里に盛る豚のバラ肉
 富美 拳銃のまぐれ当たりをうらたへて
 杉亭 ちちんぷいぷい知らんぶり婆
 江同 フラダンス炎の痕もなんのその
 同 荷風散人食傷の夏
 江同 岡場所にいる悪ぶって居続けす
 同 みんなあつまれさしもせずん
 江同 あるものは在るままに拭き秋深し
 篤子 月の高みに鳥の影ゆく
 篤子 霧巻きて北満戦線いま遙か
 惠美 沈黙のまま終はる生涯
 美亭 おしら様重ね着をまた重ねやり
 篤子 一病多災無病息災
 惠美 「やってよ」と薄荷煙草をすすめられ
 篤子 クラスメートの声ののどらか
 惠美 盆栽の花の幹には苔むして
 富敏 弥生狂言決まる配役

富敏 亭篤 富同 江惠 篤富 篤惠 江同 篤江 亭

墓

佛淵健悟捌

堂守のごとしや庵の墓
 河骨の浮く奥山の池
 高原にキャンプの子らの集ふらん
 カレーぐつぐつ煮込む大鍋
 月の下美術全集取り出して
 糸瓜の水のはやるこの頃
 誘ひ合ひ穴織祭に姉妹
 独り身の鬱かこつマドロス
 タベルナで聴く恋の唄海碧し
 牧場で草を食んでゐる牛
 この村は挙げて共産最良なり
 朝から叔父は般若波羅蜜多
 鯛焼を買ひに出づれば月ありて
 初ボーナスはほんのお涙
 町子さん国民栄誉賞を受け
 雀ちゅんちゅん蝶はひらひら
 タンデム車風切って行く花の土堤
 丸かじりする甘きオレンジ

健悟 春惜しむ地下の茶房の吊人形
 啓世 廊下にちらとあやしげな影
 雅代 ヤク打たれカラシニコフを射ちまくる
 久美子 エルニーニョさん早くお帰りで
 達子 もてなしは縞鯨をこげ唐揚げで
 子 息づける胸蔽ふうすもの
 久子 有耶無耶の世界へ落ちる乱れ髪
 路 返しそびれしポケットの鍵
 久路 駐輪場畑つぶしてもう一つ
 代 痛次々と友を奪へり
 世 行く雲の行方見定む月の縁
 路 青松虫の声のうるさく
 世 キャンパスにポスターいっぱい文化祭
 代 レミーマルタンお湯割りにする
 路 いつも留守宅配便は持戻り
 代 夢種々の絵風大凧
 久 花吹雪ハワイの力士にっこりと
 代 都電で巡る町ののどかさ

達悟 世達 悟達 久代 路久 達路 代同 世同 久達

